

第5回：パンジャブの林業

タウンサ堰灌漑システム改修計画調査に農業及び環境の団員として参加した際、環境調査の一環として同地域の林業の実態に触れることができたので、その一端を紹介したい。

調査地域周辺では、住民の燃料用はもとより、レンガ工場等の中小工業に必要な燃料供給源やその他の材料として大量の森林資源が利用されている。そのため、本地域における既存林の保全や植林活動は、木材資源の供給にとって極めて重要な役割を果たしている。森林局は地域の森林を、放牧地植林、灌漑植林、道路際植林、水路際植林、河岸性森林の5つのタイプに分けている。面積的には放牧地植林が50%以上を占めるが、これらは主にスレイマン山地に分布しており、土壌保全と畜産による利用を目的として、主に灌木類の植林が行われている。インダス川沿いの地域においては、主としてObhan (*Populus euphratica*)、Farash (*Tamarix* spp.)、Kikar (*Acacia nilotica*)等が自然植生の構成種となっている。道路際や水路際を含む灌漑植林地においては、主にShisham (*Dalbergia sissoo*)やKikar (*Acacia nilotica*)が植林されており、これらは材木や燃料木として利用されている。河岸性森林はそのほとんどが自然植生であるObhan (*Populus euphratica*)によって構成されており、生育には定期的な洪水を必要としてきた。近年、洪水が制御されたことにより河岸性森林は減少の一途をたどっており、その多くが保全林に指定されている。また、Siris (*Albizia lebbek*)は、農地に植栽されることが多く、家畜の飼料としての利用価値が高い。

これまでに、既存森の維持管理や林産物の流通あるいは植林事業の促進といった活動が、森林局によって実施されて来ている。しかしながら、洪水の制御による河岸性森林の減少に加えて、燃料木等の需要が供給量をはるかに上回っており、このままでは森林資源の持続的な利用が困難になるため、何らかの対策が必要となっている。特に、造林による森林資源の増大と燃料木使用量の削減には積極的に取り組んで行かねばならない。このためにはアグロフォレストリーの導入による農地への植林、あるいは湛水地や塩類集積地等の農耕不適地における植林活動も積極的に進められなければならない。さらに、森林資源をより効率的に利用することによって消費量を抑えたり、代替燃料を導入することなどにも力を注いでいく必要がある。



大量に利用される森林資源



灌漑植林 (Shisham)



水路際植林 (Kikar)



河岸性森林 (Obhan)